

相生湾のカニ調査

大角一尋・大角涼斗（あいおいカニカニブラザーズ）

はじめに

2020年、コロナの影響を受け、夏休みが短かったりなど、いつものように活動が出来なかったが、家に居る時間を活用して、資料の整理や、標本の整理を行った。

その他、冬場に行っている養殖カキ（カキ礁）に付着しているカニ調査や、夏場に行った潮下帯（水深2m）での潜水調査結果などを報告する。

これまでに出会えたカニ（2020.12末まで）

年度	延べ数（種）
2015	17
2016	43
2017	53
2018	56
2019	69
2020	75



《2020年 相生湾初発見種 ショウジンガニ》

1 カニの生息地

調査は相生湾全域12カ所（干潟5カ所、海域6箇所、カキ礁1箇所）を基本的に徒手で行っているが、それを3カ所（①干潟、②海域、③カキ礁）に集約し、それぞれに生息するカニに分類したので以下に示す。

- ①干潟に生息していたカニ 《7科25種》
- ②海域に生息していたカニ 《16科43種》
- ③カキ礁に生息していたカニ 《11科19種》

次に、①、②、③の3カ所のいずれの場所でも見られたカニはいなかったものの、2カ所で見られたカニを以下に示す。

- ①干潟及び②海岸で見られたカニ 1種
- ①干潟及び③カキ礁で見られたカニ 1種
- ②海岸及び③カキ礁で見られたカニ 12種

となったが、海岸とカキ礁のいずれの場所でも見る事ができるカニに注目し、カキ礁調査について考察した。

2 カキ礁調査

毎年、11月から3月いっぱいまで、水揚げされたばかりの洗浄されていない養殖カキ（以下カキ礁）に付着しているカニ調査を行っており、その事について報告する。

上記1から海岸とカキ礁の両方で見られるカニがいるが、これは水温とカキの成長、及びカニのエサと住みかに関連していると考えた。

まず、カキ礁でカニが多く見られるようになるのは、11月を過ぎた頃となり、4月を過ぎると極端に見られるカニの数が減る。

このことは単純に考えると、冬を迎え海水温が下がり始めると、それまで海底の岩礁帯や砂底で生活していたカニたちがカキ礁へ移動し、そして春を迎え海水温が上昇しだすと、再び岩礁や海底に戻っていくと考えられる。

ではなぜ、水温に関連して移動生活を行うのかについてであるが、カキの成長に関係があると考えた。

カキは垂下され養殖されているが、11月には収穫できるほどの大きさに成長し、以後、寒さを増すごとにさらに大きく成長していくが、大きく育ったカキたちは1つの大きな岩のようなかたまりとなり、それらが連なり、海の中で壁状になり、海流を遮る形となる。

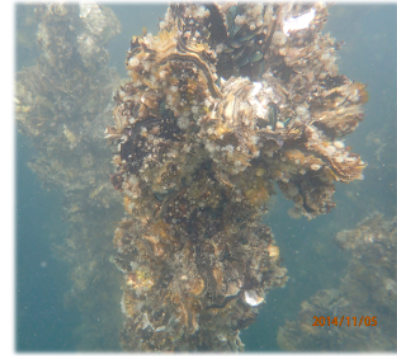
その結果、壁になったカキ礁に、非常に多くの海藻類や生き物、泥が付着していく。

そしてそれらをエサとするカニたちが、海底からカキ礁に現れるのではないかと考えた。

結論

カキ礁はエサが豊富で、隠れ家になったり、泥にまみれることで、身を隠すこともできる住み家になるなど、カニたちにとって、“冬場の別荘地”のような場所である、と言えるので、海底とカキ礁を行き来している、と言える。

その他にも、カキ礁にはクモガニ科オオヨツハモガニが普通に見られるが、2019年に新種登録された同科で、非常によく似たオオヨツハモガニが居ないか、調査を行っている。



3 カキ礁のカニ 沖の境界浮きブイ調査

相生湾上にある、境界浮きブイが交換時期をむかえ、陸揚げされたので、付着しているカニ調査を行った。そこで相生湾ではじめて発見したカニを示す。

①カクレガニ科ヤハズマメガニダマシ

②ショウジンガニ科ショウジンガニ

特に、ショウジンガニは、波が強く当たるような、外洋に面するような磯にいるとされ、これまで相生湾では確認出来なかった。

また、このカニの近縁種のイボショウジンガニは、海上を漂う漂流物に付着し、移動することが知られており、実際、兵庫県淡路島の沼島沖で船釣りをしていた際、漂流していた板切れを拾ったところ、その裏側に、イボショウジンガニが付着していた。

今回相生湾沖にある境界浮きブイで発見することが出来た事は、ショウジンガニも同じような特性があり、漂流物に付着し流れてきたのだろうか。また、数匹見つけることが出来たが、全部が流れ着いたものなのか、またはこの場所で繁殖が行われているのかなど興味がつきない。

4 潮下帯の潜水調査

夏、潮下帯で潜水（素潜り）調査を行った結果、新たに発見したカニを示す。

①オウギガニ科サメハダオウギガニ

その他、ウミウシ6種など

2021年も、搜索範囲を広げて調査を行いたい。



《ヨツハモドキ》



《サメハダオウギガニ》



《アオウミウシ》